

04%, 女子15%), 私立92.3% (男子12.5%, 女子81.8%)である。

入学競争率(入学志願者数/入学者数)(ただし、計/計、男子/男子、女子/女子の場合)は、25年度では2.8倍(男子2.8倍、女子2.8倍)、43年度では2.6倍(男子3.0倍、女子2.6倍)で、最も高率を示しているのは26年度の3.0倍(男子3.8倍、女子2.73倍)である(大学総数の場合、43年度は5.8倍)。

入学定員充足率(入学者数/入学定員)は25年の場合では0.8(国立0.7、私立1.1)、43年では1.7(国立1.0、公立1.0、私立1.8)であり、最も高率を示しているのは41年度の1.9(国立1.0、公立1.0、私立2.0)である(大学総数の場合では、43年度1.48で、最も高率を示しているのはやはり41年度の1.50である)。

3. 学生(在籍者)数の推移

学生数は、24年度発足当初においては194名(国立88、私立106(男子89、女子105))であったが、43年度には12,392名(国立832、公立209、私立11,351)(男子1,647、女子10,745)となり、当初から比べると約64倍となっている。

構成比(各年度別)でみると、24年度では男子45.9%、女子54.1%、国立45.4%(男子21.2、女子24.2)、私立54.6%(男子24.7、女子29.9)。

43年度の場合は、男子13.3%、女子86.7%、国立6.7%(男子2.6、女子4.1)、公立1.7%(男子0.3、女子1.4)、私立91.6%(男子10.6、女子81.2)となっている。

大学〈音楽学部〉学生数を、大学総数および他学部と比較してみると、次の3つを特徴としてあげることができる。

- ① 学生数の増加傾向が著しい。
- ② 女子の占める割合が大きい。
- ③ 入学競争率は低いが、入学定員定員充足率が高い。

上記3点について当日報告する。

なお、当日、学生数の推移、増加率、他学部との比較、入学定員等の資料を呈示する予定であるが、その詳細については前記〈音楽教育研究〉16-52、16-53を参照されたい。

第6部会 2

大学教育における女子

—日本と外国との比較研究—

東京大学大学院

関口 礼子

1. 前おき (比較対象など)

比較の対象は、日本の場合、大学(短大をのぞく)在席の日本人学生、場合によっては大学院学生を含める。ドイツの場合は、Wissenschaftliche Hochschule および Kunst-, Musik-, Sporthochschule 在席のドイツ人学生、場合によっては、教員養成大学の学生も含める。

2. インプット(入学前および入学時の状況など)
3. 内部構造(専攻科目など)
4. プロセス(学習期間など)
5. アウトプット(卒業後の状況など)
6. むすび

2から5で統計的手法を用い日本と西ドイツ両国を比較した結果を若干総括し、ここに掲げてみたい。

α. 一般的なまとめ

イ、オニ次大戦後の変化をたどる時、常に、西ドイツの場合より日本の場合において、その変化の傾向性が明瞭に読みとれるので、オニ次大戦後の社会変動の過程はドイツにおいてより日本においての方が激烈であるように見うけられる。(学生数の変化、学生の学科構成の変化、学科別女子の割合の変化、大学卒業生の従事する産業分野の変化、大学卒業生の従事する職種の変化、年令による女子の職種の変化など)

ロ、日本と西ドイツの間においてみられる大学生の状況についての現象上の差異は、両国の教育制度や大学制度の差異に帰するところが多い。もちろん、この教育制度や大学制度の差異を生み出す背景には、大学の外社会の社会経済制度の差異に裏付けられているのであるが。(大学生の出身階層のちがい←選抜制度のちがい。大学の学科構成のちがい「日本の社会科学系、工学系の膨張」←学生の専攻学科選択に至る過程のちがい、大学卒業生の職業構造のちがい。中途脱落がドイツでは女子学生の問題であるのに対し日本ではむしろ男子学生に多いこと←大学での学習方法、カリキュラムの組み方のちがい。日本の学生の多くが定められた年数で卒業するのに対し、ドイツの学生は卒業までの年数が規定の長さを大巾に超過し、また、それが年々長くなること←卒業の意味のちがい、社会の大学卒業者に要求するもののちがい、など。)

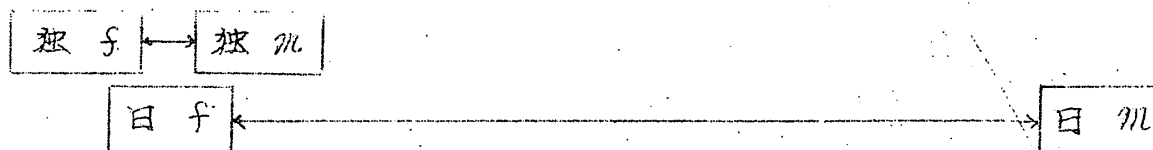
ハ、多くの差異にも関わらず、一たび女性の問題に関心をむけると、類似性、同傾向性が目についてくる。大学制度、教育制度を超えた社会経済的基盤に基づく普遍的な問題がそこには存するように思われる。次に、この問題について若干触れてみたい。

ロ. 大学卒女性の問題についてのまとめ

西ドイツの大学に比した場合の日本の大学の特徴を考えると、大学進学率の割合が高いこと、学生の層が幅広い層に分散していること、学科構成において社会科学系、工学部系統が急激に膨張し大きな比率を占めていること、卒業生の職場がサービス業に集中することなく、オニ次産業部門、サービス業を除くオニ次産業部門にも大きく開けていること、などがあげられる。

男子学生と比較した場合の女子学生の特徴をあはてみると、両国ともに、次のようなものがあげられる。男子学生に比し女子学生の進学率は高くない。出身階層は男子学生の場合より高い。専攻する科目は伝統的な学部系統に集中している。職業分野はサービス業に集中している。

こういった点を考えると、日本の学生全般と比較した場合にあらわれた西ドイツ学生全般の特徴は、男子学生と比較した場合にあらわれた女子学生の特徴とほぼ同様である。この関係はおよそ次のような図示されるであろう。



西ドイツの女子学生の状況と西ドイツの男子学生の状況の間にみられる関係は、日本の女子学生と男子学生の間にみられる関係と同質のものである。ただし両関係間の差異の度合いは大きく異なり、ドイツの女子学生の状況と男子学生の状況の間には差が小さいのに対し、日本の場合はその間の差異が非常に大きいのが目につく。すなわち、西ドイツの女子学生の状況、西ドイツの男子学生の状況、それに日本の女子学生の状況は、多少のちがいはあれ、相対的に類似しており、日本の男子学生の状況がまったく異質である。

すなわち、大学外部での変動——技術的なあるいは工業社会特有の変動——はまず、一般に男子学生の状況に変化の姿を現わし、女子学生上にその影響力を行使するのはそれよりも遅れるということになるのであろう。日本と西ドイツを比較した場合、目下のところ、社会変動は日本の方がはるかに速いので、この文化遅滞現象は両国共通の現象であるけれども、その目立ち方はドイツにおいてより日本の方が大きく、かつ深刻な様相を呈することになる。

たとえば、その共通の現象の一つは、女性においては、男子の場合より専攻科目と職種との相関が強いということである。男性の場合は各専攻分野に対して固有の職種の分野が存するのに対し、女子の場合は専攻と無関係に、教育に関する職業、保健衛生に関する職業に集中している。そして、これ以外の比較的新しく大学卒女子の職場になってきた職種に専攻科目との相関の低さは目につく。

女子が専攻を選択する際、将来の生活（特に職業上の生活）の見通しに対して近視眼的であり、慣例や家庭の意向、また親の専門に影響されることが多い。また日本のように学科別定員を定められているところでは、学生自身の態度とは別に大学が、特に女子大学が新しい社会の要求に合わせて学科別定員を再編成することなく、昔のままの傾向を維持しているということもいえる。

就職に際して、再び文化遅滞現象はみられ、概して古くから女子に開けていた専攻の専攻者の方が就職状況はよく、また他の専攻の方が適しているのではないかと一般的に考えられるような職種にまで進出がみられる。

文化遅滞現象は、他の社会経済的条件がそれを支持する時に、いつまでも長びいて存続する。この専攻内容と職種の相関の低さについても、女子の大学卒が男子の大学卒の労働力のすき間を埋める補助労働力、知的労働力の産業予備軍としての役割を果たすこととまわっていることからくるのであろう。したがって女子の側でも専攻選択の場合に、直線的に将来の職業に結びつくであろう科目よりも、むしろあたりはずれのない女子に対して伝統的な科目を優先してしまうということになるのであろうし、またそれをもって他の分野にまで進出するので、ますます補助的な知的労働力として産業予備軍的な役割に固定されてくることになるのであろう。

入学から学科構成、卒業に至るまでの過程、卒業後の状況とみてみると、次のように概括されるであろう。

女性のいわゆる「本質」と称されているものが彼女らの職業活動の形態、内容条件づけるので彼女らの職業分野はいわゆるその「本質」に近いと考えられる種類のものに制限されるからであるし、また職業志向は低くなる。こういった事情は女子学生の学習状況に影響を与え、中途退学を多くし（ドイツの場合）あるいは卒業ということ自体が自己目的化してしまったり、また、彼女らの専攻する内容は伝統的に女性に適したとみなされている職業につながる科目に制限されてしまう。この傾向が女性の持つ能力への判断

を誤らせ、女性とは特殊な科目が他の科目よりふさわしいというような考えが生じてくるのであろう。

換言すれば、女性の「本質」と称されるもの → 女性の職業活動の特殊形態 → 女性の大学での学習上の特色 → 女性の能力の判定という方向に作用線が働き、逆方向への影響力の流れはわづかにしか作用しない。

一方通行であって相互作用のないところに、種々の問題が生じてくる。能力と学習の間では、女性の能力は充分開発されずに埋れているものが多いのではないかという問題などが生じてくる。学習と職業の間では、多くの場合に、殊に女性にとって新しく開けた職業において職種と専攻の相関が低いという問題などが生じてくる。職業と女性の「本質」との間では女性が知的労働力の産業予備軍としてとどまるという問題などが生じてくる。

なお学会当日は、これらの具体的根拠となったスからちについて主として述べるつもりでいる。